

モダニズムから70年代へ

[資料あり]

9月9日[土] 9:00-12:00 | 23号館201室

司会——松隈 洋(京都工芸繊維大学)

副司会——山名善之(東京理科大学)

記録——深川 絵里香(東海大学)

1 | 主旨説明——兼松 紘一郎(兼松設計)

2 | 主題解説

①モダニズムと70年代——鈴木博之(東京大学)

②70年代の現場から

——黒川紀章(黒川紀章建築都市設計事務所)

③モダニズム建築のクライテリア——藤岡洋保(東京工業大学)

④若き世代から見る DOCOMOMO の時代

——倉方俊輔(明星大学)

3 | 討論

4 | まとめ——初田 亨(工学院大学)

DOCOMOMOの選定作業をしながらいつも話題になるのは、DOCOMOMOのMOMO、つまり「モダンムーブメントとはなにか」という命題である。

1999年にDOCOMOMO対応ワーキンググループ(WG)で20選を選定したときに主査を担った藤岡洋保は、モダンムーブメントを「合理主義に立脚し、線や面、ヴォリュームという抽象的な要素の構成による美学をよとする、社会改革志向に裏打ちされた建築運動」と定義し、1920年あたりからの分離派建築会の主張から、モダニズムへの懐疑が表明されるようになったという60年代(1970年まで)を選定範囲とした。また、「日本におけるモダニズムの展開の仕方やその意味を示すことを重視し、例えば和風建築や木造建築も選んだ。グローバルな視点でのモダニズムの見直しという提案も含めた」のである。

2003年対応ワーキンググループではDOCOMOMO Japan(以下、Japan)と連携をとり選定建築物を100に拡大した。2000年に設立されたJapanとの連携による活動、つまりモダニズム建築の存在と魅力をアピールし、選定建築の存続を訴える活動が建築界や社会に対して大きなインパクトを与えるようになったのである。

100選定リストを取りまとめる段階から主査を引き継いだ私は、歴史研究者の取り交わされるMOMOの歴史観に戸惑いながらも必然的にDOCOのCO、Conservation「保存」に取り組むことになった。同潤会や国際文化会館のように選定した建築の存続問題も起こり始めたが、リストアップされていない建築の保存に、建築界や市民からDOCOMOMOに対する期待が寄せられるようになった。モダンムーブメントをオーソライズさせる組織としての役割を担うことになったと言い換えてもよいかもしれない。委員会で検討し2005年度より毎年度10ないし20程度の建築の選定を行うことを決めた。さらに選定範囲外、1972年の中銀カプセルタワーの存続問題が起きた。選定範囲を「70年代の建築」へ広げていくときのDOCOとMOMOをDOCOMOMOの趣旨のなかでどう捉えていくか、またそこで起きてくる課題は何か、このパネルディスカッションで論議したい。(文責:兼松 紘一郎)

